大学院時代の思い出(1)

レポートで何を書くか迷うことも多い。ここ 3 日はホットな話題を集中して取り上げた。朝早くレポートを書きあげ、インターネットに公開されると、なんだか「ほっと」する。災害や安倍首相の動向など、今後も情報をチェックしながら書いていきたい。

ホットな話題だけでなく、たまには過去も振り返ってみたい。まずは大学院時代の思い出から。「最終講義」については、本レポート 8 月 4 日「地域から現代社会を考える」に講義原稿が掲載してあるので、ここでは生活面を中心に書いていこう。35 年間の教員生活を過ごすことができ、退職後も「研究生活」を続けられるのも、苦難の?大学院時代を経たからである。

1971 年 3 月、信州大学をなんとか卒業し(じつは際どかった。これについては大学時代の思い出として述べよう)、青春を歓喜した松本から大阪に向かった。大阪市立大学商学部教授の宮本憲一先生のもとで学ぶためである。大学 3 年のころ、先生の『社会資本論』を読んで感動し、計画的というより衝動的に大阪をめざした。親から反対され、「自立」できるかも不安であったが、とにかく大阪市大近くの杉本町に下宿することにした。

下宿先は大学時代の先輩の紹介によるもので、風通しが悪く、狭い薄暗い部屋であった。でも、下宿のおばちゃんに優しくしてもらい、家族的な雰囲気を味わえた。

当時はカメラもなく、写真はほとんど残っていない。右の写真は「最終講義」で使うために今年 1 月に杉本町界隈を歩いたときに撮ったものである。杉本町 2 丁目までは覚えていたので、そのあたりを歩き回ったが、下宿先の民家がどうしても見つからない。

杉本町近辺も開発が進み、マンションやアパートが目立つようになった。通りを一歩入ると、昔と同じような古い民家、曲がりくねった路地が残っていた。かすかに記憶に残る路地を歩きながら、40 数年前を思い起こしていた。

とにかく下宿を確保してから、近所の銭湯横の公衆電話(これだけは鮮明に記憶している)から、宮本先生の研究室に電話をして「事情」を話した。緊張のあまり、言葉が出なかったが、なんとか大学院ゼミへの出席を認めてもらった。先生の「ああいいよ」という言葉が今も忘れられない。正規の研究生・聴講生だと相当の費用がかかるので、「もぐり」のような形にしてもらった。生活費を稼ぐために、塾の講師や家庭教師などのアルバイトに精を出すとともに、大阪市大の図書館を使わせてもらい「受験勉強」に励んだ。そして、大学院入試の日を迎える。

(2014 年 8 月 23 日)